

今

のドルや人民元みたいに世界中に石見銀が流通していた頃は、何万人もの人の暮らしを大森と温泉津の街道沿いで支えていた。銀が取れなくなり、山や田畑では十分に支えられないとなれば、人が減るのは道理。銀のみちを歩いて多く目にするのは、墓標のように佇む空き家や休耕田だ。

銀の積み出し港だった温泉津も最盛期には四十軒も廻船問屋があったのだという。今も県内では有数の温泉街なのだが、往時とは比較にならず、朽ちるに任せた空き家や空き地はそここに見られる。おもしろいのは、それを逆手にとつて人を呼び込む仕掛けを作っている人たちがいることだ。私たちが泊まった宿も、つい最近まで空き家だったところで、オープン初日の記念すべき宿泊者になった。とは言え、それらしき華やきなど一切ない。一階に客室一間とダイニングにキッチン、風呂トイレ、二階に客室が三間。客室にはそれぞれ同じ仕様の無垢の床材、ベッド、小ぶりの机と椅子、照明があつらえてあつた。タオルはあつたが、よくホテルで見るアメニティセットのようなものは一切なく、食事もついていない。最初に説明に来てくれたが、あとはほったらかしで、チェックアウトはこちらの都合で鍵を置いて出て行けばいい。民泊の一種なのだろうが、部分的ではあつてもインテリアには

統一感があつてただの民家とは気分は異なる。一泊五千五百円というのが高いのか安いのかよくわからないが、使いたくない設備や食べきれない食事には一切支出しないのだからさっぱりしている。

手続きしてくれたのは経営者の娘さんで、二十歳そこそこの元気な若者だった。聞くと家主は家を売る気はなく、必要が生じれば原状復帰して返却することになつていくという。ためにリフォームなどはできず、元に戻せる範囲で手を加えてあるということだった。買い取つてリフォームしてとなると大ごとだが、家賃を払つて宿として利用するだけだから身軽だ。そんな家の七軒目。それぞれに持ち主の気持ちと折り合いをつけながら宿のネットワークに組み込んでいく。宿ばかりではない。飲食店をやりたい若者を呼び込み、空き家を貸し出して運営させている。起業してまだ一年も経っていないのにかなりの勢いだ。

そのシステムをこしらえたOさんとたまたま出会い、話を聞いた。ぼくの念頭にあつたのは奥出雲なので、その構想が温泉津を越えて別の地に活かされる可能性を尋ねると、「最も大切なのは人なのです。」との答えだった。場を生かすも殺すもその人次第。銀のみち起点大森、終点温泉津、銀（かね）の切れ目を縁の切れ目としないしぶとい人たちがいる。

2023.5.15

1398号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)



F690-0823島根県松江市西川津町4276-B402 gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/ 編集 宮森健次

空き家 6

木幡智恵美

蘇る家③

隣保の奥の五軒は、ぼつぼつと空き家が増えていった。そのうちの二軒、近くの中古住宅に移られたため空いていた家に、数年前、他所から来られたご家族が入られた。工務店を自営しておられるKさんご一家で、入られる前に自分でリフォームされ、玄関回りがおしゃれになった。すぐ前の空き家も買われたようで、資材置き場にされている。一家には女の子が二人居て、朝夕保育園に送迎する奥さんの車がうちの前を通る。下の子が実歩と同じくらいだ。愛想の良いご主人で、目が合うと、軽トラックの中から必ず笑顔を返される。

隣保のゴミ集荷場所は我が家の前にあり、市から配布されたネットをゴミ袋の上にかけている。しかし、ネットの上からカラスが突いたり、ネコがゴミを引き出したりするのを防ぎきれない。うちで使わなくなった風呂の蓋を乗せておいても、隙間からゴミを引きずり出している。その様子を見ていたKさんが、板を二枚追加してくれた。そうして何とかカラス&ネコ対策をしていたある時、ゴミを出そうとしたら、長方形の板の両側に、その半分くらいの板を蝶番で付け、折り畳みができるゴミ収納箱が、取っ手の付いた蓋つきで置かれていた。これならカラスにもネコにもゴミは引き出せない。ゴミ出しの日に組み立て、そうでない時は、畳んで扉際に立てておけば、車を通るのに支障がない。しばらくして、「うちのが、蓋が重くていけんっていうんでね」と、軽くなった蓋に替えておられるところに出くわした。奥さんと二人で相談して、ここにゴミを出す皆のために作ってくださったのだ。

我が家が建つところから奥の家々までは舗装されていない道路で、砂利を敷き詰めている。でも、どうしても車輪の通るところがえぐれてしまう。たまに、草を抜き、根っこに付いた土でふさいだり、道をならしたりしていたけれど、Kさんが来られてから、仕事で使った残りだといって砂利を敷いたり、道をならしたりもしてくださっている。

二年ほど前に、一人暮らしの方が息子さんに付いて大阪に行かれて空き家になったのだが、その家もKさんが引き受けることになったようで、「この先が大変ですわ」と笑いながら言っておられた。でも、若いから。頑張つて!

30代フリーター やあ、ジイさん。後期高齢者2年生になった気分はどうだい。

年金生活者 死を考えた日がなくなくなった。自分の死は経験できない。他人の死も経験できない。死はだれにも経験できないことなのに、それは確実にあると信じられている。このことは私たちの思考に矛盾をもたらす。

それで編み出されたのが想像の中で死を経験することだ。極楽や天国に行ったり、地獄に落ちたりする物語が作られた。だが、それらは厳密に言えば、死んだあとの経験であり、死の経験ではない。

このことは、想像の中でさえ自分の死を経験することができないことを示している。仮に自分が死ぬ瞬間を想像したとする。その瞬間には自分はいないはずなのに、それを想像する自分を想定している。

30代 想像自体が矛盾をはらんでい

る。

年金 この矛盾を切り抜けるには、死の死」と考えた吉本は「もし、未来から現在を見通すことができれば、それが要するに死で、死というものは、そういうふうに解釈してもいい」とも言っている(同)。彼はここで「未来から現在を見通すこと」のできる死の普遍性を語っている。

臨死体験を脳の現象として理解するとしても、それに意味を与えるのは人間であり、人間にとつての死の意味がイメージとして凝縮されているのが臨死体験ということが出来る。

30代 もしかしたら親鸞には臨死体験があつて、それをもとに「正定聚」を説いたのだろうか。

年金 たぶん違う。彼が往生の手前に「正定聚」を想定したのは、地獄や極楽といった死後の世界は実在しないと考えたからだと思う。吉本の言葉をふたたび借りれば「親鸞は、浄土が実体としてあるとは一切言っていない。そういう意味では、仏教をほとんどぶち壊したと言つていくくらい醒めている人です」(同)。死後の世界が実体

というものを生きながらにして経験できるものと考えざるほかない。生物としての死の手前に、人間としての死を決定する。吉本隆明によれば、それをしたのが親鸞だ。

阿弥陀仏の本願を信じれば、おのずから「正定聚」の位に入る。それは必ず浄土に行くことを約束された位だ。親鸞は「教行信証」でそう説いた。これについて吉本は「ほんとうに親鸞が、思想、理念、考え方として死や浄土を想定しているときは、『正定聚』の位のことを、ほんとうの死だと考えていたと思います」と述べている(『今に生きる親鸞』)。

30代 なぜ往生の前にそんな踊り場の

ようなもの考えたんだ。

年金 「正定聚」には臨死体験と共通したところがある。臨死体験でよく知られた共通パターンに体外離脱と走馬灯現象がある。前者は、病院のベッドに横たわっていた瀕死の患者が天井の近くにまで浮かび上がり、自分自身や医師、看護師らを見下ろしているか

として存在しないのは、死そのものが実体ではないからだ。言い換えれば、自分では経験できないことだからだ。

そうである以上、死は観念として想定するほかなくなる。「死」というものは、肉体的な死ではなく、観念的な死なのだということ(同)。その「観念的な死」が「正定聚」にほかならない。

30代 いまの日本人だつて、口では天国とか極楽とか言つていても、たいて

のように感じる現象を指す。後者は、自分の人生の諸場面をパノラマを見るように一気に回想する経験だ。

見かけの異なるこのふたつの体験に共通しているのは、自分と自分のいる世界とを俯瞰する位置に自分自身を置くという点だ。体外離脱を空間的な俯瞰と考えれば、走馬灯現象は時間的な俯瞰と行うことができる。自分とその世界を俯瞰する位置におれを置くことは、自分自身を普遍的な位置に置くことを意味する。

この普遍性への移行は、人間がふだんそれと意識せずに実行している死のとらえ方でもある。人間にとつて死とは、生の個性性を離れて普遍性に向かうことを意味する。生きることは、そのつど特定の場所、特定の時間を占めることであり、その意味で徹底的に個別的なことだ。死を生を否定と考える人間はしたがって、死を個性性からの離脱、言い換えれば普遍性への移行ととらえる。

「正定聚」を親鸞の説く「ほんとう

いは本気でそれを信じてはいない気がする。

年金 だから、死後の世界よりも死ぬ前のことに関心を持つようになった。「終活」という言葉が流行り出した背景にはそれがある。「終活」をすれば、心置きなく死ぬという考えは、「正定聚」に達すれば、往生が約束されるという考えに似ている。「終活」は親鸞の教えの世俗化とも言える。

30代 自分で自分の死を始末しようとするのは、死も「自己責任」と考え、市場原理のもとに置くのに等しい。

年金 自分では経験できない自分の死に責任など取れるはずがない。それを取ろうとするのは、死を実体と考えているからだ。「終活」が「正定聚」と似ていながら違う点はそのにある。相続や葬式や墓や延命処置をどうするかといったことを決める「終活」が実体としての死、生物としての死を前提にしているのに対し、「正定聚」は観念として死、人間としての死を指している。

ニュース日記 876
中村 礼治

死を考えない日 がなくなった